

日本の大学生における HIV 感染者・AIDS 患者に対する 偏見と知識 —中国との比較—

飯田 敏晴*・伊藤 武彦**・井上 孝代***

Knowledge and Attitude of Japanese Students toward People Living with HIV/AIDS —A Comparison with Chinese—

Toshiharu IIDA, Takehiko ITO,
and Takayo INOUE

The number of people living with HIV/AIDS (PLHA) has been increasing in Japan. The correct knowledge through HIV prevention education will help reduce not only the risk of transmission but also the prejudice and stigma towards PLHA. Seventy-four college students answered questionnaire on HIV/AIDS-related knowledge and attitude, of which data was compared with the results of Lee et al. (2005)'s research in China. We found that Chinese had more prejudice than Japanese. Amount of HIV/AIDS knowledge and degree of prejudice were negatively correlated. It is suggested the primary prevention education is important to reduce prejudice.

key words: HIV/AIDS, prejudice, China-Japan comparison

問題と目的

HIV/AIDS の世界的蔓延が問題となっている。日本においても感染者が増加している。感染予防には正しい知識の普及と抗体検査の受検が大事である。それに加えて、近年、治療技術の進歩により長く生きられる慢性疾患と位置づけられるようになり、HIV/AIDS に対するネガティブな態度である偏見を低減させていくことは、感染予防にも当事者の生活の質を高めるためにも重要な課題である。しかし、この分野における基礎的な知見は乏しい。

本研究では、大学生を対象に HIV/AIDS に関する知識と当事者への偏見（態度）との関連性を検討することを目的とした。そして、中国東部地域でのデータ (Lee, Wu,

Rotheram-Borus, Detels, & Guan, 2005) が得られていることに對し、青年への HIV の感染予防教育という筆者らの問題意識による日本での実態を調べるための追試研究を行った。仮説としては、以下のように考えられる。

- 仮説 1 HIV/AIDS に関する知識の多いものは偏見が弱い
仮説 2 知識の多いものは HIV/AIDS への恐怖が強い
仮説 3 偏見が強いものは HIV/AIDS への恐怖も強い

方 法

1. 調査対象 首都圏内 A 大学の一般教養科目を履修する者 74 名を対象とした。2007 年 7 月に授業時間内に用紙を配布し記入終了後回収した。倫理的配慮として知識問題の正答の解説を直後に行い、説明資料を配付した。
2. 調査内容 (1) フェースシート：性別、年齢、HIV 感染者・AIDS 患者との接触経験の有無を尋ねた。(2) HIV/AIDS に関する知識：Dias, Matos, & Goncalves (2006) を参考に HIV/AIDS に関する知識項目 9 項目を作成した。4 件法で尋ねた。(3) HIV/AIDS に関する偏見：Lee et al. (2005) の HIV/AIDS に関連した偏見を測定する質問 4 項目を和訳し使用した (Table 1)。(4) HIV/AIDS に対する恐怖度：HIV/AIDS に対する恐怖度を尋ねた。「HIV/AIDS は怖いと思う」かどうかについて 4 件法で尋ねた。

結 果

回答はすべて有効であり、74 名 (男=33 名, 女=41 名) から結果を得た。対象者の平均年齢は 20.73 歳 ($SD=1.82$) であった。接触経験については、1 名 (1.4%) が「有」、67 名 (90.5%) が「無」、6 名 (8.0%) が「無回答」であった。

1. HIV/AIDS に関する知識 各項目において正答を答えた人数は、主なものとして「健康的に見える人でも、HIV に感染していることがありうる」が 73 名 (98.6%)、「HIV は、コンドームを使わないでセックスすると、それが一回でも感染する」が 65 名 (87.7%)「経口避妊薬 (ピルなど) は HIV 感染を防ぐことができる」が 61 名 (83.6%) と平均 84.02% の正答率であった。
2. HIV/AIDS に関する偏見 各項目に対しネガティブな反応を示した際にその出現率を算出した。その結果、「HIV 感染者は何か悪いことしたに違いない、罰せられても仕方がない」は 4 名 (5.4%)、「HIV 感染者を隔離すべきだと思う」は 8 名 (10.81%)、「エイズ患者とは友達にな

* 明治学院大学大学院心理学研究科 *** 明治学院大学心理学部
Department of Psychology, Meiji Gakuin University
** 和光大学現代人間学部
Department of Psychology and Education, Wako University

りたくない」は 22 名 (24.32%)、「HIV 感染者が、他人の子どもの面倒を見ることは安全である」は 18 名 (29.70%) であった。性差について検討したところ、「HIV 感染者は隔離すべきだと思う」において、女性より男性のほうが否定的な反応を示す傾向にあったが有意ではなかった ($\chi^2=3.36, df=1, p=.067$)。

仮説 1, 2 を検証するため、正答数が全 9 問正答 5 名 (6.8%), 8 問正答が 44 名 (59.5%) だったため、誤答が 9 問中 1 問以下のものを「高知識群」、誤答が 9 問中 2 問以上のものを「低知識群」に分類し、それぞれの群における偏見の平均値の差の比較を行った。その結果、「2. HIV 感染者は隔離すべきだと思う」、「3. HIV 感染者が、他人の子どもの面倒をみることは安全である」、「4. エイズ患者とは友達になりたくない」において有意な差が認められた。また、知識正解数と各変数との関係について、Pearson による相関係数を算出したところ、偏見と恐怖との間を除いて、 $r=.222\sim.306$ の有意な弱い相関が認められた。以上のことから、仮説は、一部を除いて支持された (仮説 1, 2)。

Lee et al. (2005) の偏見についての項目の結果と本研究の結果を比較すると (Table 1)、すべての項目において日本人学生のほうが有意に得点が低かった (「1. HIV 感染者は何か悪いことにしたに違はなく、罰せられても仕方がない」 $\chi^2=46.39, df=1, p<.001$, 「2. HIV 感染者は隔離すべきだと思う」 $\chi^2=85.26, df=1, p<.001$, 「3. HIV 感染者が、他人の子どもの面倒をみることは安全である」 $\chi^2=81.03, df=1, p<.001$, 「4. エイズ患者とは友達になりたくない」 $\chi^2=21.31, df=1, p<.001$)。

考 察

1. HIV/AIDS に関する知識と偏見 (態度) との関係 知識が正確な人は、偏見が少なかった (仮説 1 を支持)。これは、先行研究とも一致する (例えば、Dias et al., 2006)。いくつかの調査によって、感染予防知識の乏しさから、感染者との接触において、その感染リスクを極端に高く見積

めることが示唆されている (Herek, Capitanio, & Widaman, 2002)。伊藤 (1997) は、正確な知識を伝えることによって偏見の認知的側面に働きかけることの重要性を指摘している。本調査結果も、こうした指摘を支持するものである。

2. HIV/AIDS に関する知識と恐怖との関係 HIV/AIDS に対する恐怖と知識との間に正の弱い相関が認められた ($r=.235, p<.05$)。決定係数 5.5% の弱い関係ではあるが、この結果を踏まえ、正しい知識に基づいた恐怖と、誤解と偏見に基づく恐怖との関係性について、より詳細に検討していきたい。

3. Lee et al. (2005) と本研究の比較 中国市場労働者に比べ日本人学生の方が圧倒的に偏見が少なかった。この結果の背景として、Lee et al. (2005) の対象者の学歴が高卒以上が 11% しかいなかったのに対して、本調査では全員の対象が大学生であった。そのため、HIV/AIDS に対する理解度にも大きな関連があったものと考えられる。

また年齢についても本調査の対象者の平均年齢は 20.73 歳であったのに対して、Lee et al. (2005) では 35 歳であった。そのため若年層のほうが HIV/AIDS に対してより柔軟な見方をしたものとも考えられる。そして社会文化的背景による差異も推測される。例えば、中国では当事者の一族まで偏見が及ばないように、一族から別居させられたり、医療機関を受診しないといった報告がある (Lee et al., 2005)。

本研究は、厳密なサンプリングの手続きを経たものではなく、一般化は難しい。しかし、限定的ではあるが、知識と偏見の間に関連が示されたことは、偏見低減のための教育の重要性を示唆する。今後の感染予防および当事者の生活の質を向上するための取り組みのための基礎資料として本研究は位置づけられるものとする。

引用文献

- Dias, S. F., Matos, M. G., & Goncalves, A. C. 2006 AIDS—related stigma and attitudes towards AIDS—infected people among adolescents. *AIDS Care*, 18, 208–221.
- 伊藤武彦 1997 偏見と差別の心理と留学生への対応 井上孝代 (編) 留学生の発達援助, pp. 95–109. 多賀出版.
- Lee, M. B., Wu, Z., Rotheram-Borus, M. J., Detels, R., & Guan, J. 2005 HIV-related stigma among market workers in China. *Health Psychology*, 24, 435–438.
- Herek, G. M., Capitanio, J. P., & Widaman, K. F. 2002 HIV-related stigma and knowledge in the United States: prevalence and trends, 1991–1999. *American Journal of Public Health*, 92, 371–377.

(受稿：2007. 12. 14, 受理：2008. 5. 7)

Table 1 HIV/AIDS に関する偏見における国際比較*1

| | 飯田・伊藤・井上 (2008) | Lee et al. (2005) |
|--|--------------------|----------------------|
| | 首都圏内 A 大学生 N=74 | 中国東部地域 N=209 |
| 1. HIV 感染者は何か悪いことをしたに違はなく、罰せられても仕方がない。 | 5.40 | 50.00 |
| 2. HIV 感染者は隔離すべきだと思う。 | 10.81 | 72.80 |
| 3. HIV 感染者が、他人の子どもの面倒をみることは安全である。*2 | 29.70 | 85.00 |
| 4. エイズ患者とは友達になりたくない。 | 24.32 | 55.70 |

*1 「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の出現率

*2 逆転項目